



【小学校低学年の部】

「そのときがくるくる」を読んで

蓬田小学校2年 藁谷 渉さん



ぼくがこの本を読もうと思ったのは、『そのときがくるくる』つてどんなみなんだろ

う。」
と、とても気になったからです。

読んでみると、小学一年生のたくまくんが、ゆめに見るほど大きな、なすをたべられるようになっていくようすが書いてありました。この本を読んで、こころのこったばめんが二つあります。

一つ目は、おじいちゃん、おばあちゃんのいえにおとまりをして、はたけのお手つだいをしているところです。たくまは、じぶんでしゅうかくしたなすを肉まきにしてたべました。一口はたべたけれど、やはりおいしくはありませんでした。ぼくも今年の夏休みに、しんせきのおばあちゃんのとこで、やさいのしゅうかくをしました。じぶんでとったじゃがいもは、いつもいじょうにおいしかったです。けれど、じぶんでしゅう

【小学校中学年の部】

「神様のパッチワーク」を読んで

蓬田小学校4年 磯 愛香さん



「ママ、パッチワークつてなに？」

と、わたしはこの本の題名が気になり、お母さんに聞きました。

「パッチワークは、いろいろなものぬのをぬい合わせて大きなぬのを作ることだよ。」と、お母さんは教えてくれました。

この本の主人公の結は、特別ようし縁組で赤ちゃんのころからみかん農家の石川さんの家に来て家族になり、お父さん、お母さん、お姉ちゃんの四大家族でくらししています。お姉ちゃんも特別ようし縁組で家族になりました。わたしは、特別ようし縁組という言葉の意味がわかりませんでした。が、本を読みすすめると、じじようがあつて赤ちゃんを生んだお母さんが育てられない時に、別のお母さんに育ててもらおうということだと分かりました。

仲よくくらししていた石川家にある日事けんが起こります。お姉ちゃんが友達をなぐつて友達のめがねをこわしてしまったのです。お姉ちゃんが友達をなぐつた理由は、友達に血がつながっていないことをばかにされ、赤の他人が集まって家族のふりをしていると言われたからです。お姉ちゃんはお母さんに理由を話せず家を飛び出してしまいますが、家族みんなでさがし出し、温かくむかえまし

【小学校高学年の部】

万葉と令和をつなぐアキアカネ

小平小学校5年 上遠野友眞さん



ぼくがこの本を選んだ理由は、今、絶めつしそうな赤トンボ（アキアカネ）をどうやって守り、その事をどうやってみんなに広げ、理解してもらうのかを知りたかつたからだ。

この話は、筆者が新潟県でアキアカネに出会い、アキアカネの生息について知りたくなり、いねを育てているつねぞうさんの田んぼで調べるところから始まる。つねぞうさんの田んぼでは、時間と手間をかけて有機さいばい田んぼ作りを行っていた。アキアカネの羽化は一週間ほど続くそうで、つねぞうさんの田んぼだけで羽化が行われていた。多くの家でも田んぼを作っているので、「どうしてもつねぞうさんの田んぼだけで羽化するんだろう。有機さいばいだからかな。」と不思議でしやうがなかった。

有機さばいの田んぼの土の中では、ゲンゴロウやおたまじやくし、イトミミズなど生き物達がおたがいを食べる、食べられる関係にあり、その仕組みが栄養価の高い土を作るということがわかった。そして、ふつう四、五本の苗を植えるところを、つねぞうさんは二、三本しか植えない。「なんでそんなやり方をするのだろうか。」と疑問に思った。苗は育つと多く植えても少なく植えても結果同じ本数になるという。そして、つねぞうさんの苗



うかくしたはずのししとうはにがくておいしくなかったの、たくまぐんの気もちがわかりました。

二つ目は、おじいちゃんと川に行つたところ。ごはんのとき、あんなにおいしそうになすをたべていたおじいちゃんが、むかしはなすがきらいだったことを知って、とてもびつくりしました。ぼくは、ピーマンがいて、

「みんなはたべられるのに、どうしてじぶんはたべられないんだろう。」

と思つていたけど、ちよつとでもいいからチャレンジしていれば、そんなにあせらなくてもいいのかもしれないと思いました。きらいなものがぐんぐんとすきになるときが、「そのとき」だということがわかりました。

本を読んだ後に、ぼくにも「そのとき」がきました。よる、かぞくとやきにくをしていたら、ピーマンを食べることができました。

「そのときはほんとうにくるんだな。」と、思いました。こんどは、にがてなパプリカの「そのとき」がきてほしいです。

た。帰つて来てからお父さんは、「うちの家族は、神様のえりすぐりのぬのでつくつた最高のパッチワークだ。」

と言いました。わたしは、この言葉を聞いて家族とは、血のつながりがなくても、おたがいを大切に思う気持ちや思いやり、信じる事できずなができて、家族みんながつながり合うのだと思いました。

わたしの家も、結と同じく四人家族です。お父さんやお母さん、お兄ちゃんの仕事や部活でいそがしい時もありますが、みんなで協力して生活しています。いやな事やこまった事があつた時、家族に相談すると心が軽くなつて味方がいてくれると安心します。家族のだれかが暗い顔をしていると心配になり、どうにかかわらせたいと思います。家族みんなのわらつた顔を見ると幸せな気持ちになります。今まで血のつながりなんて考えた事もありませんでした。もしかたしが結と同じ立場でも、家族への思いはかわらず、とても大切に大好きなそんざいです。

結は二分の一人成式で、しょう来のゆめと家族への感じの気持ちを伝えました。わたしも今年十才になりました。もしも二分の一人成式があつたら、わたしも家族みんなへの感じの気持ちや大好きな気持ちを伝えたいと思います。そして、ずっと家族みんなと仲よくくらしていきたいと思っています。おたがいを大切に思つて信じる気持ちを家族だけではなく、友達やまわりの人達にも持ち、たくさんの人とつながっていきたいと思ひます。そして、わたしのパッチワークを作つていけたらいいと思います。

の植え方は、一本一本のいねが太くて強く育つということを知り、ぼくは「なるほど」と、なつてきた。確かにいねの本数が少なければ、いねが多いときより一本一本に栄養分がいきたるし、太陽からの栄養分もより多く受けられる。「いねの力を信じる」「水田の力を信じる」とは、こういうことだったのかと理解できた。夏が近づくと、つねぞうさんの田んぼでアキアカネの羽化が始まつた。つねぞうさんの田んぼで以前はアキアカネの羽化は見られなかつたそうで、有機さばいに変えてから、アキアカネが羽化するということが、わかつたそう。このことを通して、有機さばいのすごさを知ることができた。

そして、この本を読んでもう一つわかつたことがある。それは、トンボは日本の初代天皇である神武天皇の時代からなじみがあつたということだ。

この本を通して、生き物が苦しむ薬を使わない有機さばいで田んぼ作りを行っているつねぞうさんが、田んぼにも生き物達にもやさしい田んぼ作りをしているところが、すごいと思つた。有機さばいは大変だろうと思うが、ぼくもしょう来たくさん勉強して、田んぼや生き物など自然にやさしい田んぼ作りをしたいと思う。

ずっと昔からわたしたち日本人になじみの深かつたアキアカネを絶めつしないようにして、この平田村でもみんなに好きになつてもらいたい。ぼくが大人になるころには、たくさんアキアカネが飛んでいるすがたをたくさん平田村の人に見てもらえるように、これから身近な自然を大切にしていきたい。